

2歳前後における受動的体験から能動的体験への変換

大 桑 萌*

1. 問題と目的

模倣の中には見聞きした他者の行為をその通りに模倣するのではなく、他者によって“されたこと”を“すること”へと変換することがある。例えば、くすぐられる経験をした子どもが他者をくすぐるようになることがあるだろう。“くすぐられる”体験を“くすぐる”体験へと、つまり受動的な体験を能動的な体験へと変換するようになるということは子どもにとって大きな達成といえる。受動的な体験を能動的な体験へと変換するということは、自己と他者との志向性の変換が必要となる。つまり、模倣能力だけでなく他者の立場の理解を必要とするのである。この受動的な体験が能動的な体験へと変換されていくプロセスについて、これまで十分な研究がなされているとは言えない。本研究は受動的な体験を能動的な体験へと変換させることを受動－能動逆転と呼び、2歳前後の子どもたちを対象として、そのプロセスを実験的に探る中で自他関係の理解について追求しようとするものである。ここでは、XからYに対する志向的な行為Aがなされた後、今度はYがX(あるいはZ)に対して同じ志向的な行為Aを行うことを受動－能動逆転と称する。その中でも本論文で取り扱うのは、XからYに向けた直接的な物理的行為、あるいは単純なコミュニケーション行為の受動－能動逆転である。前者は、相手の身体に対して物理的に効果を及ぼすような行為であり「叩く」「つねる」「蹴る」など媒介物を用いないものと、「棒で叩く」「相手の口にモノを入れる」といった媒介物のある行為が考えられる。後者の場合は、「手を振る」「馬鹿と言う」など志向的な単純コミュニケーション行為である。これ以外にも、ごっこ遊びの構造で見られる「医者」と「患者」役の交替や、「鬼」と「コ」の交替といった役割を明確に意識して交替するというのも、受動－能動逆転の一種と言える。このような役割を意識した受動－能動逆転は役割を意識することと役になりきるためのセリフを発するなど高度な言語レベルを要すると考えられる。そのため、本論では最も単純な形の受動－能動逆転について研究を行うことによって、＜されたこと＞を＜すること＞へと変換することの本質に迫ることを重視して研究を行うこととする。

Tomasello(1999)は受動－能動逆転と類似の概念として、役割交替模倣(role-reversal imitation)という言葉を用いている。Carpenter, Tomasello & Striano(2005)は、この役割交替模倣を①大人のモデルが自分自身に行ったことを子どもが自分自身に行うこと、②大人が子どもに対して行ったことを子どもが大人に対して行うこと、さらには③モノを介した行動における大人と子どもが果たす役割を交替することとして12か月児と18か月児を対象として実験を行っている。そして、役割交替模倣と代名詞の使用との関連を示している。しかし、①のような行動は単なる行動の再

現であり役割を交替しているとはいえない。またCarpenter et al.(2005)の実験では「鼻を軽く叩く—叩かれる」という単純な受動—能動逆転についての実験と「ぬいぐるみを隠す役—見つける役」といった役割を意識した受動—能動逆転についての実験が混在している。そのため、それぞれを独立した能力として測定する必要がある。役割交替模倣という言葉にはさまざまな模倣の形が含まれているため、受動—能動逆転だけを取り上げて検討を行うことによって、子ども達の「<されたこと>を<すること>に変換する力」を測定できるものと考えられる。

今まで、スプーンなどのモノを差し出し食べさせられていた乳児が、今度はモノを差し出し親に食べさせるといった行動は受動—能動逆転である。これは麻生(1990)や川田・塚田・川田(2005)の報告によって10ヵ月頃から見られるとされている。このような役割交替や、ボール転がしのような受動—能動逆転も1歳前後にできるようになることが報告されている。また、麻生(1980, 1984, 2014)の日誌的記述に基づくに逸話データによれば1歳半前後からこの「<されたこと>を<すること>へと変換させることが可能になり始めている。しかし、慣習的な行動の受動—能動逆転および、一人の子どものデータだけでは他者から「<されたこと>を本当に「<すること>へと変換しているのかは疑問が残る。事実、Carpenter et al.(2005)の受動—能動逆転についての実験では、18ヵ月児であっても約2割の対象児しか受動—能動逆転ができていない。受動—能動逆転ができるということは自己と他者との立場を逆転させて考えるということである。つまり、自己の身体を他者の身体に、他者の身体を自己の身体へと身体を逆転させるのである。そのためには、自己と他者との身体とを対応させる力が必要となる。麻生(1980)によれば、1歳までには自己と他者とが基本的に同型的な存在であると理解できているという。さらに1歳半頃までには、基本的な模倣能力が備わっているものと考えられる(例えば、Meltzoff, 1988; Carpenter, Akhtar & Tomasello, 1998など)。そう考えると、受動—能動逆転という少し高度な模倣は1歳半以降に可能になっていくことが予想される。他方、川田(2011)の実験では「サカナとタモ」課題を用いて「<されたこと>を<すること>へと変換する能力」について検討を行っている。「サカナとタモ」課題はサカナを持つ役とタモを持つ役とがあり、サカナをタモに入れるという協同行為を達成する課題であり役割を意識した受動—能動逆転であると言える。川田(2011)の課題では、1歳半前後で2割弱、2歳前後で6割、2歳半前後になると8割強の子どもが役割交替を行なうという結果になっている。Carpenter et al.(2005)の実験では、受動—能動逆転が1歳半でも困難であることが示され、川田(2011)のより高度な役割を意識した受動—能動逆転では2歳前後に可能になっていくということから受動—能動逆転が2歳頃までには獲得される能力であると予測される。そこで本研究では、1歳半から2歳半の子ども達を対象として実験を行い、受動—能動逆転の能力の発達について分析を行うこととする。

本研究では、受動—能動逆転をしていることを明確にするため直接身体に関わる行為を課題として設定した。例として、相手に対して手を振るといういわゆる「バイバイ」と「頭を叩く」ことを取り上げる。「バイバイ」は「手を振る—振られる」という受動—能動逆転の関係が成り立つ行為である。しかしながら、手を振られた相手が、「自分に向けて手を振られた」から「手を振り返した」のか単に手を左右に動かす動きを模倣したのかの判断をするのは非常に難しい。一方、相手から自分の頭を叩かれるという直接身体に関わる行為の場合、自分自身の頭を叩いたら行為の模倣をしていると言え、自分の頭を叩いた相手に対して、その相手の頭を叩き返したら受

動―能動逆転していると言える。このように、直接身体に関わる行為は志向性が明確であり受動―能動逆転していることを確認しやすいからである。また、課題には慣習的な行為は除くのが妥当であると考ええる。10 ヶ月頃から見られるという〈食べる―食べさせる〉というやりとり(麻生, 1990; 川田ら, 2005)もスプーンを他者の口内に入れるというように身体に対する志向性が存在している。しかしながら、“食べる”という行為は日常的に自分自身で行うこともある行為であり、他者自身も行っている行為でもある。そのため、自己と他者との口とを対応付けることができれば可能になると考えられるため、食べさせられた行為を食べさせる行為に変換しているとは言えない。日常的に行われる行為や慣用的な物の使い方の場合、子ども達が受動―能動逆転をしているのではなく見聞きしているものを模倣しているだけの可能性が大きい。そのため、新規もしくは稀有な行動・物の使い方を他者から〈された〉時に、他者に〈する〉ことができるのかを検討することによって本当に受動―能動逆転をしているかどうかを確かめることができるのである。そのため、本研究で扱う受動―能動逆転では子ども達にとって馴染みのない行為を行うこととする。

今回の実験では、2歳前後の子どもにおける受動―能動逆転の能力を測定するとともに以下の2つのことが影響するのかを合わせて検討を行うこととする。1つ目は、媒介物の有無が受動―能動逆転に影響するか否かである。媒介物があるということは、自分に対して〈されること〉が視覚的に明確になるため、媒介物がある課題の方が媒介物がない課題よりも容易になることが予想される。Carpenter et al.(2005)の実験においても、媒介物がある課題の方が媒介物がない課題よりも役割を交替しており、本論においても確認のため媒介物の有無について検討することとする。2つ目は、身体部位の影響である。目に見える身体部位に対する行為の方が目に見えない身体部位に対する行為よりも受動―能動逆転をすることが容易であると考えられる。その理由は、Piaget(1945/1988)やJones(2007)が目に見えない位置への行為の模倣の方が目に見える位置への行為の模倣より難しいとしているからである。以上のような点を考慮した実験を行うことによって、子ども達の受動―能動逆転の能力についてより明確に測定できると考える。

受動―能動逆転という行為は、自分が〈されたこと〉を理解した上で、今度は相手にし返すことであり、自己と他者との立場を入れ替えることができるようになった証と言える。行為の模倣は生後1年目の終わりころから可能になるが、受動―能動逆転が可能になるのはそれ以降であり、より高度な模倣であると考えられる。本研究では、〈されたこと〉を〈すること〉へと変換する力の中でも最も単純な形である受動―能動逆転の能力について分析を行うこととする。受動―能動逆転の能力を獲得すると予測される2歳前後の子ども達を対象とすることによって、受動―能動逆転の能力の発達について明らかにすることを目的とする。

2. 方法

2-1. 対象児

2013年1月～2014年1月にかけて、保育園や児童館の一室を借りて実験を行った。実験は、1歳半から2歳半の39名(男児19名：女児：20名)が実験に参加した。そのうち、9名は実験途中で泣き出したり、実験に対して興味を示さなかったため実験を中断した。先行研究から、受動―能動逆転が可能になる年齢には差が見られたため、対象児を2歳未満群と2歳前半群とに分けて分析する

こととした。そのため、最後まで実験を行った30名(男児：14名、女児：16名)のうち、2歳未満群として18ヵ月から19ヵ月の子ども(平均生活年齢は18.5ヵ月)が8名(男児：3名、女児：5名)、2歳前半群として25ヵ月から27ヵ月の子ども(平均生活年齢は25.6ヵ月)が11名(男児：7名、女児：4名)の計19名が参加した。研究の実施に関しては、保育園・児童館及び保護者からの同意を得ている。

2-2. 材料

ぬいぐるみ、ミニカー、紙皿、プラスチックのコップ、ビデオカメラ2台を用いた。2台のビデオカメラのうち1台を対象児の表情や動作などを観察するため子どものみを写すビデオカメラとし、もう片方を実験者に対して行動を行う様子を観察するため実験者と対象児の両方を写すこととした。

受動—能動逆転課題として媒介物の有無によって各4課題、計8課題行う。以後、媒介物を用いた課題をモノ媒介課題、媒介物を用いない課題を身振り課題とする。

2-3. 課題

モノ媒介課題 目に見える身体部位における課題を2課題行った。「腕と車」課題では、ミニカーを「ブブー」と言いながら対象児の手首から肩の辺りまで走らせ、「ピーピー」と言いながらバックさせた。「腹とコップ」課題では、プラスチックのコップを「ポコ」と言いながら対象児のお腹にあてた。目に見えない身体部位における課題も2課題行った。「頬とヌイグルミ」課題では、ぬいぐるみの顔を対象児の頬にあて「チュッ」と言った。「頭と皿」課題では、紙皿を対象児の頭に乘せ、紙皿が落ちるときに「ドスン」と言った。

身振り課題 目に見える身体部位における課題を2課題行った。「腕と手」課題では、「ドンドン」と言いながら対象児の腕を手の平で軽く叩きながら最後に脇下をくすぐった。「腹と手」課題では、「ピタッ」と言いながら手の平を対象児のお腹にあてた。目に見えない身体部位についても2課題行った。「頬と指」課題では、実験者の人差し指を対象児の頬にあて「ツン」と言った。「頭と手」課題では、「ピタッ」と言いながら実験者の手の平を対象児の頭にあてた。

以後、目に見える身体部位における課題を可視課題、目に見えない身体部位における課題を不可視課題と呼ぶこととする。

2-4. 手続き

実験者と対象児が1対1で向かい合って座った。児童館での実験は、乳幼児が普段入ることのない部屋で行った。そのため、児童館で実験を行った5人は子ども達がリラックスして実験を行えるように保護者が付き添った。保護者は、保護者のひざの上に対象児をのせるか対象児の背後に座った。また、保育園での実験は子ども達も普段使用することのある部屋で行った。保育園で行った25名の中で、7名は保育園の保育士がひざの上に対象児をのせるか対象児の背後に座って実験を行い、18名は保育士が付き添うことがないまま実験を行った。保育士が付き添わなかった18人は、実験者とのラポートがついており、保育士が付き添った者と同様の程度にリラックスしていた。

実験手続きは以下の通りである。まず、絵を書くことによって対象児とのラポール形成をはかる。その後、コップとヤカンを用いてお茶くみごっこをする。実験者がヤカンからコップにお茶を注いで飲むという行動を2回行う。そして、対象児に手渡して、「○○ちゃんの番」と言う。これは、ラポール形成を行うという意味と、慣習的な行為の模倣が可能であるかを見るために行なっ

た。対象児とのお茶くみごっこを終えた後は、課題に移る。8つの課題の実施順序はカウンターバランスをとった。モノ媒介課題と身振り課題の行為はそれぞれ2回行なった。そして、「○○ちゃん(君)の番です」と言った(媒介物がある場合はそれを手渡す)。対象児が何も反応しない場合は次の課題を行なった。

2-5. 課題の評価と得点化

実験者が対象児のある身体位置に対して行為を行った後、対象児が実験者の対応する身体位置に対して行為を行なった場合を「受動—能動逆転ができた」とみなした。また、対象児が自分の身体に対して行為を行ったあとで、実験者の身体に行為を行った場合は、最終的な対象児の行為を評価し、「受動—能動逆転できた」とみなした。さらに、対象児が自分の身体に対してのみ行為を行った場合は模倣であるとみなし、受動—能動逆転しなかったとみなした。実験者が対象児に対して行った行為を対象児が誰に対しても行わなかった場合は、「受動—能動逆転しなかった」とみなした。「受動—能動逆転できなかった」としなかったのは、受動—能動逆転する力があってもあえてしない場合が考えられるからである。

8つの課題において受動—能動逆転ができる課題を得点化する（1つの課題ができれば1点、行わなければ0点）。そして受動—能動逆転の達成と年齢との間に関連が見られるか否かを検討する。

3. 結果

モノ媒介課題と身振り課題はそれぞれ4課題ずつ行った。まずは、モノ媒介課題について分析を行うこととする。モノ媒介課題における獲得点数は0点から4点のいずれかである。モノ媒介課題において2歳未満群(獲得点数平均値：0)と2歳前半群(獲得点数平均値:1.27)とで獲得点数に違いが見られるかどうかをマン・ホイットニーのU検定を用いて検討を行った。その結果、モノ媒介課題においては2歳未満群よりも2歳前半群の方がより受動—能動逆転をすることができるという結果が得られた($U=24.00$, $p<.05$)。

身振り課題における獲得点数は0点から4点のいずれかである。身振り課題において2歳未満群(獲得点数平均値：0)と2歳前半群(獲得点数平均値：0.36)とで獲得点数に違いが見られるかどうかをマン・ホイットニーのU検定を用いて検討を行った。その結果、2歳未満群と2歳前半群とでは身振り課題において獲得点数に有意な差は見られなかった。

身振り課題で1点以上を獲得した3人は全員モノ媒介課題でも受動—能動逆転をしていたが、モノ媒介課題で受動—能動逆転ができて身振り課題でおこなわなかった者が2人いた。2歳前半群の約半数がモノ媒介課題で受動—能動逆転が可能であったが、身振り課題は3割であり、2歳前半群にとっても身振り課題は困難であることが分かる。

今回の課題に対して、子どもは受動—能動逆転を行う以外に、自分自身に対して実験者の行った行為を模倣的に再生する反応も見られた。たとえば「腕と車」課題では、実験者の腕ではなく自分自身の腕に車を走らせるような反応である。モノ媒介課題において、4課題中1度でもそのように自分自身に行為を行なった子どもの人数は14名であり、そのうち2歳未満群は8名中8名(100%)、2歳前半群は11名中6名(54. 5%)であった。2歳未満群と2歳前半群とで、行為を模倣していた人数に違いが見られるかをフィッシャーの直接確率法を用いて検定したところ、有意差が見られ($p=0.045$)、2歳未満群の方がモノ媒介課題において有意に自分自身に行為を行う子どもの

人数が多いことが示された。また、身振り課題において1度でも対象児自身に行為を行なった人数は、2歳未満群は8名中0名(0%)、2歳前半群は11名中5名(45.5%)で、合計5名であった。2歳未満群と2歳前半群で、行為を模倣していた人数に違いが見られるかをフィッシャーの直接確率法を用いて検討を行なったところ、有意な差が見られ($p=0.018$)、身振り課題においては2歳前半群の方が行為を模倣する子どもが多いことが示された。

モノ媒介課題では2歳未満群の方が自分自身に行為を行う人数が多かったのに対して、身振り課題では2歳前半群の方が自分自身に行為を行う人数が多かった。2歳前の子ども達はまず自分自身に道具を使って模倣的に行為を行うことによって、行為を確認する。そして、他者に対して行為を行なったと考えられる。つまり、子ども達は、まず自分自身に行為を行うことによってその行為の仕方・道具の使い方を理解する。そして、その行為を繰り返し模倣していくことで他者に対しても行えるようになっていく、つまり受動—能動逆転ができるようになっていくことも可能性として考えられる。そう考えるとモノ媒介課題において2歳未満群よりも2歳前半群の方がより受動—能動逆転ができたという結果になったのも2歳前半群は練習を行わなくてもその媒介物を使って受動—能動逆転をすることができるまでの力が育っていたと言える。そして、身振り課題は2歳前半群においてもまだ自分自身に対して模倣的に行動を行う段階であり、受動—能動逆転をするのが困難であると言える。

さらに、目に見える身体位置への行為の方が目に見えない身体位置への行為より受動—能動逆転ができるという予測に従って、検討を行なった。モノ媒介課題および身振り課題にはそれぞれ可視課題と不可視課題が2課題ずつあるため、獲得点数は0点から2点のいずれかである。2歳未満群においては、モノ媒介課題と身振り課題において全員が0点であるため、2歳前半群について分析を行うこととする。2歳前半群においてモノ媒介課題のうち、可視課題(獲得点数平均値:0.81)と不可視課題(獲得点数平均値:0.45)とで受動—能動逆転の獲得点数に違いがあるかどうかを符号検定によって検討したところ、有意な差は見られなかった。また、身振り課題においても可視課題(獲得点数平均値:0.09)と不可視課題(獲得点数平均値:0.27)とで受動—能動逆転の獲得点数に違いがあるかどうかを符号検定によって検討したところ、有意な差は見られず、目に見える身体位置の方が見えない身体位置よりも受動—能動逆転ができるという予想に反した結果となった。Piaget(1945)によると目に見えない場所の模倣は1歳半頃可能になるのに対して、今回の対象児が2歳前後であったため違いが出なかったものと考えられる。Piaget(1945)による模倣の達成年齢は見聞きした行為の模倣に限ったものであったが、志向性のある受動—能動逆転であっても、目に見える身体位置と見えない身体位置とでは受動—能動逆転の達成に違いが見られないことが示された。

4. 考察

本研究は、2歳前後の子ども達を対象として、＜されたこと＞を＜すること＞へと変換する能力の発達について実験を通して検討を行ったものである。

本実験の結果からは、モノ媒介課題において2歳未満群よりも2歳前半群の方がより受動—能動逆転をすることができることが示された。モノを使用した受動—能動逆転は2歳以降に可能になっていくことが示唆された。また、身振り課題においては2歳未満群と2歳前半群とで有意な差が見

られず、2歳前半群においてもほとんどの対象児が受動—能動逆転を行わなかったことから身振り課題の方がモノ媒介課題よりも困難であることが示された。2歳前半群において、モノ媒介課題では約半数がモノ媒介課題において受動—能動逆転が可能であったにも関わらず、身振り課題は3割しか受動—能動逆転しなかったのは、媒介物という行為の手がかりとなるモノの存在が受動的な体験を能動的な体験へと変換させることを容易にさせていると言える。具体的に言えば、子どもが自分のお腹にコップをあてられた時に、相手のお腹にコップをあて返す場合を考えてみる。子どもに必要なのは、自分のお腹と相手のお腹とを対応させることである。自分のお腹とコップという関係を相手のお腹とコップという関係に置き換えるだけでこの行為は成立する。他方で、身振り課題のような媒介物がない場合である。例えば、子どものお腹に相手の手があてられたとき、今度は子どもが相手のお腹に自分の手をあて返す場合を考えてみる。子どもは、自分のお腹と相手のお腹とを対応付けるだけではなく、自分の手と相手の手とを対応させる必要がある。コップのような媒介物がないと相手の手をあてられるということを自分の手をあてるという行為に変換するのが難しくなる。身振りのみの場合には、異なる2つの身体部位を交差させなければならないため受動—能動逆転が困難であると考えられる。モノがあることによってモノと身体位置とを一致させやすく、自他の身体とを対応させやすくしていることが明白である。モノという存在が自己と他者との役割交替を結びつける“媒介物”になっているのであり、〈されたこと〉をくすること〉へと変換するのに媒介物があると容易になるというメカニズムがここにはある。

受動—能動逆転の能力は、2歳前半から次第に可能になり、それがさらに育つのは2歳後半以降になることが予測される。今回行った「受動—能動逆転」課題と川田(2011)の行った「役割を意識した受動—能動逆転」とでは課題の構造に違いが見られる。たとえば「腹とコップ」課題では自他の身体部位をコップと関連させなければならないのに対して、川田の課題では「サカナとタモ」というように身体部位の対応が直接必要でない課題であったことによるものと思われる。サカナとタモとを連結させて考えられることで可能になる動作よりも志向性があり自己と他者との身体を交差させることを必要とする受動—能動逆転には役割を意識した受動—能動逆転とはまた違った難しさがあることが示唆される。また、「サカナとタモ」課題の場合、サカナを入れる役とタモを持っている役という明確な役割があり2人が協力し能動的に行動しない限り目的が達成されない。それに対して、本課題には明示的な役割がないため、対象児が自発的に行為を行わない限り課題は達成されない。そこに、本課題を達成する難しさがあった可能性がある。

〈されたこと〉をくすること〉へと変換することはもっと早い時期にそれが可能になるという指摘がある。麻生(1984, 2014)の縦断的に一人の子どもを詳細に観察したデータでは受動—能動逆転が1歳半前後に見られると報告されている。また、麻生(1980)はHoffmanやGuillaumeなどの事例を基にして受動—能動逆転が1歳後半から見られるという報告をしている。しかし、本研究の実験結果では、モノ媒介課題であっても2歳未満群において受動—能動逆転が可能であったのは一人もいなかった。受動—能動逆転が可能になることになる時期に関して大きなズレがあると言えるだろう。このようなズレが生じた理由として2つ可能性が考えられる。1つ目は、見知らぬ大人と限定的なやりとりの中で受動—能動逆転を行わなければならなかったということである。今回対象児となった子どものうち9人も対象児が途中で実験を中断しており、1対1での実験が困難であったことを示している。この時期の子どもは人見知りをしたり、課題を嫌がること

が多いと言えるだろう。今回の実験でも子どもをリラックスさせるための工夫を行ったが、さらにそれを徹底させる必要がある。2つ目は、今回の受動―能動逆転課題において、子どもは実験者に「された」ことをし返すだけでなく、「された」ことを自分自身に対して行うことがあった。今回の実験では、実験者が対象児に対して行為を行った後、「〇〇ちゃんの番だよ」と言って交替を促す発言をするが、これを、“今、実験者があなたに行ったことを同じようにあなたに対してやってみて”という意味として対象児が捉えたとしても間違っていない。つまり、他者にくされたこと>を自分自身にくること>に置き換えるという反応があることは十分考えられるのである。そう考えると、「あなたの番」という言葉を受動―能動の変換として捉えられなかったからといって、受動―能動逆転ができなかったことを示すとは必ずしも言えない。「〇〇ちゃんの番だよ」という実験者の言葉を交替することを要求していることと理解しスムーズに受動―能動逆転ができるのは2歳後半以降であると考え。

本実験は、いつ頃から“されたこと”を“すること”へと変換すること、つまり受動―能動逆転ができるようになるかということを検討したものである。この受動―能動逆転ができるということは、自己と他者とを同型的なものと理解しているだけでなく、モノを介することによって他者から自己へ、自己から他者へという志向性を理解することができるのである。志向性を理解するということは、自己と他者との関係を交差して考えることであり自己と他者とは交替可能な存在であることを理解できているということである。本実験の結果からは2歳以降に受動―能動逆転が徐々に可能になっていくことが示された。そのため、今後は2才後半のデータを詳細に検討する必要がある。

見たこともなくされたこともないことを、受動的な体験から能動的な体験へと変換させることは困難である。これには高度な認知的プロセスが関連しているだろう。このメカニズムを追求していくことは今後の課題である。“する―される”関係を理解するということは、他者の意図や心境を自分と重ね合わせて考える心が育っていくことと言っても良いだろう。このように“する―される”という関係については包括的に議論していく必要があるものと考え。

引用文献

- 麻生武(1980) 子どもの他者理解―新しい視点から― 心理学評論, 23(2), 135-162
- 麻生武(1984) ある健常児における自他の基本構造の成立 「発達」20, 103-108 ミネルヴァ書房
- 麻生武(1990) “口” 概念の獲得過程 発達心理学研究, 1, 20-29
- 麻生武(2014) 生後2年目における新しい“身体”: パントマイムの誕生 子ども学, 2, 154-172.
- Carpenter,M.,Tomasello,M., & Striano,T.(2005) Role reversal imitation and language in typically developing infant and children with autism. Infancy, 8, 253-278
- 川田学(2011) 1～2歳児における役割交替模倣と自他認識の発達 日本発達心理学会大会発表論文集.
- 川田学・塚田みちる・川田暁子(2005)乳児期における自己主張性の発達と母親の対処行動の変容: 食事場面における生後5ヵ月から15ヵ月までの縦断研究 発達心理学研究, 16(1), 46-58
- Tomasello,M(1999)the cultural origins of human cognition. Cambridge :Harvard

University Press(Tomasello,M,(2006). 心とことばの起源を探る(大堀壽夫・中澤恒子・西村義樹・
本多啓 訳)東京：勁草書房)

Conversion from Passive to Active Experience at Around Two Years of Age

OKUWA Moe

At what age can infants convert passive experience into active experience? This study examined this “passive–active conversion” in infants. Nineteen infants (younger than two years old group, mean: 18.5 months; older than two years old group, mean: 25.6 months) were tested on gesture tasks and tasks with objects. The infants in the younger than two years old group had more difficulty in the tasks with objects than those in the older than two years old group. However, gesture tasks were difficult for the latter group. There is difficulty in converting passive experience to active experience for children around two years old. The findings also revealed that one-year-olds have the ability to recognize themselves and their similarities with others. Between the ages of one and two, the observed children were able to understand the relation between themselves and others. With regard to passive–active conversion, recognizing oneself in relation to others was discussed to facilitate a deep understanding of how the “intentionality of oneself and others intersects.” Thus, discussing these results in consideration of the role reversal imitation described by Tomasello (1999) and Kawada (2011) is necessary.